

論考

心を育てる……ええつ、なんということを

— 成人教育の視点から「心を育てる」をとらえ直す —

徳島大学 開放実践センター 助教 西村 美東士

一 わたしたち大人自身の心に問題がある

中央教育審議会は、一九九八年四月、「新しい時代を拓く心を育てるために—次世代を育てる心を失う危機—(中間報告)」を発表した。

「ふむふむ、そうだよな。今の子どもたちの心は問題あるかな」ですませてしまう人(素朴肯定派)、ちよつと待ってほしい。

一方「ええつ、なんということを、だから、教育は押し付けがましくていやなんだよ。まあ、わたしたちは大人だから、教育から自分の「心を育てられる」なんて、ことはないいいけど」と感じる人(教育懐疑派)、まあそういうわずに、心を育てる教育や指導の意味を、この際、あらためて考え直す機会にしてほしい。もしかしたら、本当の「心を育てる教育

や指導」にあなた自身が出会ったことがないだけの話なのかもしれないのだから。

はくは、今回の中間報告の副題の「次世代を育てる心」という言葉に注目する。これは、もっぱら今のわたしたち大人の心を指している、それが危機だといっているのである。実際、第一章のテーマは「未来に向けてもう一度我々の足元を見直そう」であり、「我々大人が、大人社会全体、家庭、地域社会、学校の足元を見直し、改めるべきことは改め、様々な工夫と努力をしていこう」といい、「新しい時代への夢を語り、未来を切り拓く大切さを伝えよう」といふ大人、子どもに伝えるべき価値に確信を持たない大人、しつけへの自信を喪失し、努力を避ける大人、子どもを育てることをわずらわしく感じる大人が増えていく。子どもを育てるべき大人社会が、こう

した「次世代を育てる心を失う危機」に直面していることこそ、我が国の抱えている根本的な問題である」とまでいい切っているのである。たしかに、青少年問題に関する文献においても、最近数年の傾向として、現代社会における大人自身の不幸に言及する論調が増えている(総務庁青少年対策本部「青少年問題に関する文献集」毎年度末発行)。

ここまでくると、「素朴肯定派」は、「だけど、大人は、子どもと違って心の教育なんてできないからな」といつてすませようとし、「わたしたちは大人だからいいけど」と思っている「教育懐疑派」の人は、「大人まで教育しようなんて余計なお世話だ」と反発を強める人が多いのではないか。あるいは、ここまできてもなお、「たしかにひどい大人はいるから」といつて他人事にしようとするか、「わた

しはすでに責任のある指導者だから」といって、少なくとも自分だけはそういう「教育対象」であることから免れようとする人もいるかもしれない。そういう一般的なと思われる状態と比べれば、ぼくは、「教育懐疑派」の最初の「ええ、なんということを」という直感こそが、かなり本質を突いたものだと思う。「自分の心まで教育されてしまうことへの抵抗心」、これを大切にしたい。

以上の前提のもとで、「子どもを育てることのできる成人」の心を育てることはできるか、という問題に進むことにする。結論だけいっておくと、先に述べた「抵抗心」の尊重にもかかわらず、ぼくの答えは「できる」である。なぜなら、公民館はじめ成人教育の場で、現に、当たり前のようにながら人生にわたって成長し続けているのだから。

二 用語の言い換えだけでは問題は解決しない

ぼくが参加しているあるメーリングリスト（インターネットによるグループ内での手紙のやり取り、以下MLと略す）において、先日、次のような問題が提起された。

図書館での「指導サービスinstruction service」について、アメリカの図書館界では普通に使われているようなのに、日本の公共図書館の司書の中には「市民に奉仕するべきサービスの現場で『指導』などという思い上がり

た考えは絶対にいけない」という拒否反応を示す人が相当数いたということなのである。

たしかに、大人（この場合は市民）に対して「指導」という概念を用いることは、最初、ほかのメンバーにも、ぼくにも抵抗があった。しかも、最初、次のように「教育懐疑」的なレスポンス（返事）をしていた。

指導という言葉を聞くと、引きこもりの若者たちのカウンセラー・福田富士也さんが、ぼくがある「青少年指導者」の講座のメンバーを引き連れて話を伺いにいったとき、「指導したい人はこの世にたくさんいるでしょうけど、指導された人なんていないんですかね」と強烈過ぎる一言を穏やかにこやかに発せられたことを、いつも思い出します。

市民に「あなたを指導しますよ」という言葉は使わないんじゃないかなあ。市民に使わない業界用語 役所用語

mitoちゃんのホームページ

このページの最新更新日は平成10年06月10日水曜日です。



新ブーの会館で富士山のもとにて（手拭い付き）

あなたは 人目の訪問者です。(since 1998.6.1)
 ぼくのホームページは未完成なところがたくさんありますが、成長過程ということで、お許しください。

ぼくのことについて

センター(大学)案内

写真メディア集覧(一)

書いた本の紹介

最近書いていること

読者のみなさんに書いた原稿

友がたの書いた文章 - 佐野市立図書館 北野信子(未完)

ぼくの受けた緊急ホームページ(ジャカルタ日本人学校)

この行だけ個人連絡手段として使っています...ごめんなさい...

ぼくの発言に関するお問い合わせは mitochan@as.tokushima-u.ac.jp までメールください

は、内部でも避けたほうがよいのでは。(メディアリテラシー教育について)問題は、(援助ではなく)instruction(指導)の方になるのかな。メディア活用技能についてはinstructionはあっても、メディアリテラシーにおける主体性の涵養においてのinstructionは、「ちよっとおまえ、そんなにえらいのか」という感じですよ。しかし、問題提起者(仁上幸治さん/早稲田大学図書館の緻密で丁寧なり・レスポンス(返事)に対する返事)によって、指導とい

言葉問題を単純に忌避するだけであれば、次のような問題が生ずることが明らかに became した。

・広報サービスや案内サービスとは異なる次のレベルの専門性の高いサービスとしての指導サービスが、案内サービスのレベルと同等になるおそれがある。

・大学では「卒論指導」などという言葉があるけれど、誰も抗議しない。市民には控えるべき言葉づかいが、学校や大学では堂々と罷り通っているということになる。

・学校や大学や企業では「指導」という用語を使い、社会教育の現場でだけ別な用語を使う場合、生涯学習の観点からは、議論のための共通の用語を失うことになる。

・指導はダメで、英語のインストラクションならいいということなら、逆に、指導という言葉にこびりついている日本のマインスマイミジを上回るプラスマイミジを押し出して、ふつうに使える言葉にすればよい話なのではないか。

今回の問題提起のおかげで、とくにテクニカル(技能的)な、初歩から専門までの知識と技能のハウツー伝授の場合は、指導という言葉は問題ないだろうという、本ML内での「応」の「収まり」は見えてきたように思う。

しかし、その「指導呼称容認」の結論は、あくまでも問題提起者の仁上さんが明瞭に述べたように、「いかに生きるべきか」というような人生論や主体性論とはまったく別のものとして切

り離れた場合、という条件付きのものである。それでは「心を育てる」という場合はどうなるのか。ぼくは、この「収まり」に関して次のようにコメントした(軟弱なコメントではあるが)。

・そういわれても、教育の主要な目的は人間形成ですからねえ。最近は「生きる力」とかもいわれてる。そして図書館も社会「教育」施設だ(その法的位置づけには昔から司書の反対運動があったようですけど)。それに情報リテラシー教育の主張は、なんといつても、テクニカルな面ではなく、あふれる情報に対して主体的に取捨選択するという「態度形成」の問題でしょう。

・やっぱり、学校教育や社会教育は文字通り教育であり、指導者は文字通り指導をする人なのでしょう。国民が主人公という建前の社会教育においても、教える側に立つ講師という「教育者」はいますし、さらには社会教育の理想郷(生涯学習社会)に至るまでの長い過渡期間においては、「社会教育」専門職員、「指導者」指導者がいて当然でしょう。でも、これは学校教育でも同じなんです。が「教える人は(学習者から学ぶ人)であり、指導者は指導される人の自発的動機に依拠して指導するんですよ。それから大切なのは、やっぱり、教育者側、指導者側の、「無知と非力の自覚と受容」(後述)なんだと思います。

・(言葉の言い換えですませようとする問題について)生涯教育を生涯学習に言い換えることによってだけ「国民主体」になったような雰囲気をつくらうなんて、なんだか姑息ですよ。ね。もともと、生涯学習を支援する社会的教育的諸機能全体が生涯教育なんですから。

・問題は、「態度変容の学び」において、教育や指導という言葉が成立するかどうか、そして、その「手の内」を学習者側にどういう言葉で(内部で本当に使うのだったら、外部でもそのまま使え、というのがぼくの意見)表現するかということでしょう。

三 大人に対する心の教育や指導は可能か

繰り返しになるが、この章の問いに対するぼくの結論は、可能、である。教育懷疑派のようにすべての人の単純な自己教育しか認めない人が不可能と答えるならともかく、子どもにだけは可能だが大人には不可能という素朴肯定派の答えは、絶望的ともいえる大きな問題をはらんでいる。その人がふと我に返ったとき、「だったら、子どもにとっても地獄のような教育や指導なんだろうな」と気づくはずではないか。それでも、一部の体育会系のように「自分も我慢してきただけだから、今の子どもも社会のために我慢しろ」というのが、やはり、ここで「心を育てる」学校教育や

社会教育をめざす場合、今までわたしたちが思い込んできた教育の姿とは異なる「もうひとつの教育」の姿を探し出し、「新しい時代への夢を語り、未来を切り拓く大切なことを」(中央教育審議会)のような自信をもって、楽しみに、できる!と答えたいのである。ただし、それは「できる」であって、「できている」では決してない。あとで述べるように(無知と非力の自覚、「できていない」などという大それた自信はほくにもない。

大人の心を育てるという教育の可能性を考えるにあたって、ここではあえて、最も抵抗が強いと考えられる大人に対する教育的指導のあり方について踏み込んでみることにしよう。

指導は「指さし導く」と書く。

何を指すかという教育目標(＝学習の到達目標)であろう。だから、自分には教育目標があるのにそれを学習者側には秘密にしておくような指導は、本当の指導ではないということになろう。次に「心を育てる」などといわれても、そんな面での教育目標なんかおこがましくてもないという指導者もいるだろう。そういう人は、指導者としての資質がかなりあるとほくは思うが、先に述べた「もうひとつの」教育や指導の存在の可能性をも考えて、これ以降のほくの文も読んでほしい。

次に、導くということとは、その教育目標の方向に手を引いてあげることであり、これも

大変なことだ。自分だって健全(まったく欠け目なく異常がないこと)な心をもっているはずがないのだから。だが、先のMLでは、大学のゼミの教師が「教えない教師をめざす」といつていたという発言もあった。これも上手な導き方のひとつなのかもしれない。そして、「不完全な自己への自覚」さえあれば、これから述べるような導き方ならできるはずだとほくは考える。

なお、これから述べる「大人に対する(心の)指導」のあり方は、実は子どもにとっても「地獄ではない、もうひとつの教育や指導」のあり方を示すものではないかとほくは思っている。

(一) 非日常的な相互関与を意図的に深める。

徳島大学大学開放実践センターの研究会で、ほくは、センターのこれからの役割として「情報提供を乗り越えて相互関与へ」という文脈で提起したことがあったのだが、今回のMLでの議論を同研究会で紹介したところ、「指導に代わるいい言葉」として、その「相互関与(interaction)」にヒントがあるのではないかという指摘があった。その指摘を受けて、指導の本質は、とくに心を育てるといいう場面においては、指導者と学習者の相互関与を非日常的な深いものにして、学習者の気づきのあるものになるように、意図的に行為することなのではないかとほくは思った。たしかに、これができるば、すばらしい指導とい

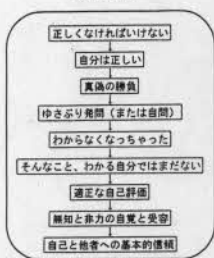
えるだろう。

小児精神科医の河合洋は、今日の子どものけのぎりぎりの状況をふまえて、「ほざくんじやねえ」と訴えている。子どもにはなく、子どもを取り巻く親や教師などの大人に対してである。他人の痛みがわからない大人たちから発せられる、感情を伴わない意味のない言葉の洪水(ほざき)に、子どもたちは SOS を発しているというのである。「意味のある言葉」をたくさん受けるために生まれてきたはずの大人たちに対して、ほざきの連続の不幸な日常のなかで、もし、指導によって日常では得られない学習者との深い相互関与が実現できるのなら、その指導はこの社会における突発的な意図的行為といえるのではないか。公民館では、それができるのではないのか?

(二) 指導者自身が、無知と非力を自覚し、なおかつ、受容する。

「私は真、あなたは偽」と思い込んで(信念に凝り固まって)いる人にとっては「自分がわかっていないことに気づくこと」(無知の知)が重要である。わからなくなることによって、答えを出すのを保留して問い続けるという生産的な構え(交流分析では、幼児期に親とのふれあい等によって培われた人間と人に対する態度を「基本的構え」といい、基本的信頼に基づく構えを「生産的」とする)に戻るることができるのである。では、わから

図表1 真偽の勝負から無知と非力の自覚へ



なくならない人はどうしたらよいか。わかっていないということこそを人に自覚させるような学習指導者からの質問が有効である。これを「ゆきぶり発問」という。そういう指導者がいない場合は、あとは自問という手段しか期待できない。こういうゆきぶりを経て、無知と非力の自覚が生まれ、「まあ、いいか。これから少しずつやっていこう」という自己の欠点や弱点をも抱え込んだ受容につながる、自信(自分への信頼)と他信(他者への信頼)が形成される(図表1)。

以前「ちょっとおしやれな教授法」という音楽大学での演習で、ばくが「目玉焼きの作り方」という「模範授業」を行ったとき、あるまじめな学生が「Tettoちゃん私たちよりも目玉焼きについてよく知っているんですか」と聞いてきた。ばくは「ふたをした方が

おいしくできあがることなど、目玉焼きの作り方に關して伝えたいことはあるけど、学習者側より知っているかどうかはわからない」と答えた。すると、彼女が「そんな人が教える側に立つこと自体、いけないことなのではないか」といったのである。たしかに彼女は、自分よりはるかに優秀な先生から音楽を習うことに慣れているから、そういう「いい加減な指導」に抵抗を感じたのだらう。この場合は教授法のシミュレーション(模擬訓練)であったが、ばくは、たとえ本書の教授活動においてもそういうことがあってもよいと思っている。指導者側に無知と非力の自覚さえあれば、双方向教育などによって、むしろ結果的にはより効果的に学習者側の主体的な学習を支援することにつながるかもしれないのだ。

(三) 教育と学習の間に流れる暗くて深い河を認識しつつ、舟を漕ぎ続ける。

教育＝学習援助、すなわち当然のことながら教育は学習を援助するためにあるというのが、それは本当か。この問題は、「教育は主体的な学習にとって役に立つか」というアポリア(行き詰まりの難問)に類するものであることから、以下のように情緒的な表現になつてしまふことをお許しください。教育＝学習援助の等号には暗くて深い河が流れているとは思ふ。ばくは、まず、この暗くて深い河の存在を伝えていきたい。次に、この河は、もしかしたら向こう岸にはたどり着けない河なのかもしれない。それなのに、学習援助であろうとして舟を漕ぎ続けている人が、この「上下同質競争社会」の同時代に命を燃やしている。ばくはたどり着けないかもしれない向こう岸に向かって舟を漕ぎ姿こそ、人間としてのかわいい姿だと思う。この本では、そういう指導のあり方を探っていきたい。生き方を指導したいという人はいても、指導されたいという人はあまりいないだろう。そういう指導の困難性に立ち向かってみたい。

右も「癒しの生涯学習」からの引用である。先に述べたように、学習者の「自分の心を教育されることへの抵抗心」を尊重しつつ、学習者主体の指導を試みようとする指導者にとっては、つねに自己の指導の有効性が疑わしいものと思えてくることだらう。「ところで、

自分のほうの指導者としての主体性はどうか
 ってしまっただけだ」というわけである。逆に、
 学習者からのねぎらいや感謝のちよつとした
 一言でささやかな自信がもてたりするときも
 あるだろう。とくに「心を育てる」教育、ば
 くくの言葉でいえば学習者の態度変容のための
 指導においては、厳しいいい方になるがその
 繰り返しである。そして、男と女の間に
 にも、最終的には理解し合えない「暗くて深
 い河」が流れている。しかし、だからといっ
 て、ふてくされてしまつて、相手という彼岸
 に向かって舟を漕ぐことさえしなくなつた
 ら、その人の姿はもうかわいくない。

四 おわりにーわたしたちはどんな心 をもちたいのか

本稿の最初に述べたように、中央教育審議
 会の中間報告は、「新しい時代への夢を語り、
 未来を切り拓く大切さを伝えよう」といふ大
 い大人、子どもに伝えるべき価値に確信を持てな
 い大人、子どもを育てることをわずらわし
 く感じる大人が増えている。子どもの心を育
 てるべき大人社会が、こうした「次世代を育
 てる心」を失う危機に直面している。そこで、
 我が国の抱えている根本的な問題である」と
 いっている。

じつは、ばくには、この表現が今ひとつし
 っくりきていない。わたしたちは、第一義的

に、将来の社会や次世代を担う子どもたちの
 ために生きているのだろうか。わたしたち大
 人だって、本当は自分がより幸せになろうと
 して生きていてもよいのではないか（そう思
 つてしまつて）ところが「根本的な問題」のひ
 つだという人もいる。かもしれないが、「自分
 がより幸せになる」ための一環として、子育
 て（親育ち）だって楽しませてもらいたいの
 である。むしろ、深くそのように「自分のた
 め」と思えないまま強迫観念で子育てにかか
 っている人こそ、現代社会の不幸にすっぽり
 はまってしまう人々なのではないか。
 以前から、親の期待に沿おうとして過剰な
 努力をしようとした子どもの苦しみは問題
 になっているが、最近気づいたことだが、同
 様に、親だって、子どもの期待に沿おうとし
 て過剰な努力をするなんて本当はまっぴらこ
 めんのはずだ。

「あなたの心を育てる」といわれたとき、
 その指された「心のあり方」というものが、
 教育を受けるものにとってこのようにそも
 も本気になれないものだとならば、これは指
 導行為など成り立つわけがない。空しく響く
 だけだ。極端にいえば、人々から本音のこ
 ろではいやがられてきた教育や指導の再来と
 もとなえられかねない。

本来なら、そこまでいうためには、報告の
 各論にわたって逐次的に検討しなければなら
 ないところだろうが、今回はその余裕がない

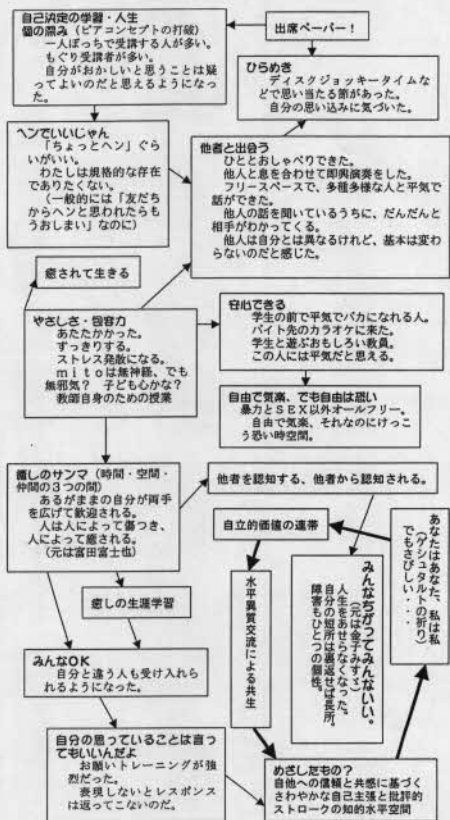
ことをお許しいただきたい。たしかに、たと
 えば、名実ともに「一体感あふれる「コンテナ
 ー家族」から、個人の人格の存在を認識し合
 った意図的にコミュニケーションを行う「ネッ
 トワーク家族」への転換の提案ともとらえら
 れるところなど、現代社会の動向に敏感に対
 応した部分は数多く認められる。それらは十
 分評価されるべきである。しかし、全体的に
 はこの報告の趣旨からいって仕方ないことか
 もしれないが、題名どおり「危機対応型」で、
 「子どもたちの」を主体とした提案が多いの
 である。ばくは、少なくともこの報告が基調と
 する「新しい時代」や「未来」のためという
 言葉は、やや「感情を伴わない意味のない言
 葉」のような感じがするということを指摘し
 ておきたい。

もっと、子育てを含めた大人の幸福追求全
 体にとって、「今こそ」の実感から「夢を語
 り」、それが結果として「未来を切り拓く」こ
 とにもつながるという「楽習」の展望を指さ
 せないのだろうか。もっとも、それは、中央
 教育審議会の役割などではなく、公民館をは
 じめとするわれわれ社会教育現場の役割なの
 かもしれない。

そこで、ばくが、この春、音楽大学を去る
 にあたって、大学の授業の締めくくりに、二
 年間の付き合いの長い大田短大二年生に
 「miticの授業の印象」に関する自分個人にと
 ってのキーワードを一人一人出してもらって

またこの図を掲載する(図表2)。図を見て気づくように、そのほとんどが、態度や雰囲気に関することである。

さらに単位認定に結びつかない狛犬(東京都狛江市中央公民館青年教室)においてはなおのこと、これらの「心」に関することがはくの意味だったといえるのではない。

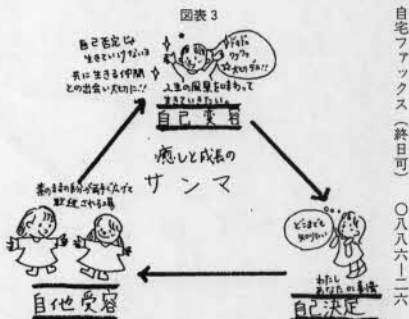


かと思。無知と非力のばくではあるが、それだからこそ現代社会の、そして人間存在の、孤独な宿命のなかで、ばくとして大学教師や公民館講師という「指導者」として役に立つことができたのだと思いたい。そこでのばくは、わずかながら、いわばネットワーク型のは、指導者の役割を果たしたのだといえよう。そ

どうか保留の状態である。じつは、本稿の基調となっている自著『癒しの生涯学習』副題も、「ネットワーク指導論」とする予定であった。しかし、若者たちが、「指導論」はどのうも感じが悪いというのである。ただ、「自己決定活動の『指導』とは何か」という「まとめ」の簡単な表はその本の巻末につけておいて

ればあとの表に示したように、①初めの二歩を勵ます、②ミニ・ヒエラルキーを早めにつぶす、③潔い撤退を促す、の三点だと考えている。さらに、神奈川県藤沢市青少年協会の若者たちが、ばくが「指さそう」としたサ・ンマ（時間・空間・仲間）のあり方について、絵にしてくれて、これがあるの、これを紹介してお（く）。（図表3）

しかし、本稿においてさき、指導という語自体を学習者に対してオープンに、積極的に使っ



図表 4 自己決定活動の「指導」とは何か (まとめ)

項目	①	②	③
現代社会の病理 だれか助けてよ!	家族関係の病い 不毛な真偽の勝負	教育システムの歪み 画一的物差の内面化	ピアコンセプト みんなの目が怖い
生涯学習の再定義 自分らしく生きたい	発達とともに癒しも =あるがままの自分	事実よりも真実を =ワンダーランド	積極的消極性も大切 =立つ鳥跡を濁さず
個の深みと出会う 開かれた心の持ち方	内容の専門家 =指導主体	方法の専門家 =支援主体	人生の専門家 =学習主体
個と出会えない 閉ざされた心	教条主義 =事大主義	御都合主義 =合理化	欺北主義 =消極的消極
今後のトレンド ビジネスも成立?!	癒しのサンマの提供 =無条件相互肯定	社会貢献の提供 =フィランソロピー	MAZEの提供 =スキゾなプロセス
他者の幸福追求援助 3大テクニック	対話とシンパシー 個の深みとの対話	ストローク 存在の認知の伝達	エンカウンター 異なる特組と出会う
社会教育における 自己決定の指導の発展	集団動員一個の尊重 一個の回復 (主体)	上下同質→水平同質 →水平異質 (共生)	行政主導→市民主体 →公民協働 (共育)
ネットワーク型の 指導者の役割遂行	初めの一步を助ます =開きたい心を開く	ミニ・ヒエラルキーの 形成を早めにつぶす	深い撤退を促す =積極的消極の潔さ

たので、最後にこれを掲載してまとめの代わりとする (図表 4)。

「大人の心を育てる」指導のあり方については、公民館関係者のみなさんと、逃げず、急がず、これからもじっくりと考えていきたい。

― 18007
参考文献
西村美東士「生涯学習・く・ろ・ん―主
体・情報・迷路を遊ぶ」学文社
西村美東士「こ・こ・ろ生涯学習―いばり

たい人いりません」学文社
西村美東士「癒しの生涯学習―ネットワー
クのおじわい方とはぐくみ方」学文社
※本稿で取り上げた「ML」の詳細について
は、個人的にお知らせします。